

# 石薬師の偉人伝 あまのしゅういち 天野修一氏

## 1. 石薬師での暮らし

タイムレコーダーやパーキングシステム等で名高いアマノ株式会社の創業者天野修一氏は、明治23年(1890)に鈴鹿郡石薬師村(現鈴鹿市石薬師町)で生まれた。自伝(1963年発行 73歳時)をもとにこの文を書いているが、自伝のタイトルは「鈍根運」である。彼の人生における体験の表現で、最も大切なのは正しい行為「鈍」であり、それを揺るぎない努力「根」で実行することにより「運」が開け、豊かな心、豊かな生活が実るという意味だそうである。自伝序章のタイトルも「頑張り続けた私の人生」。生まれ持った頭脳の優秀さだけではなく、粘り強さ、好奇心、思いやり等の人格的な強みを存分に発揮して、周りを幸せにする人生を送られたといえる。

5人兄弟の長男で、学費の負担を減らすために、年子の弟とできるだけ学年が重ならないようにと父親が考えて、修一氏は1年早く、弟は1年遅く小学校に入学させた。大変優秀であったので、旧制第一中学校(現県立津高等学校)にも高等科2年修了で入学した(大抵は、高等科4年修了で入学)ため、全校で最年少(12歳)の中学生であったそうである。父親からの第一中学以外の受験は認めない、落ちたら丁稚奉公に出すという究極の選択の中で、人生最初の頑張りであっ



天野修一氏(アマノ株式会社提供)



天野修一氏の生家 真ん中の格子戸の家 前の道は東海道 (自伝「鈍根運」より)  
天野記念館は生家跡に建てられている

た。中学入試のために地元の須原武吉郎氏（石薬師小学校校長：明治 26 年～明治 28 年）等に勉強を教えてもらったことを感謝し、また地元の同級生との交流を懐かしみ、石薬師への愛を持ち続けていた。

## 2. 故郷を離れてからの活躍

旧制中学校卒業後、大阪高等工業学校（現在大阪大学工学部）を経て明治 43 年（1910 年）に海軍に入り、大正 14 年（1924 年）に退役。その間に大正 2 年（1913 年）23 歳で「A 式綴紙器」（現在のホッチキスに近いもの）の特許を得ている。また軍の依頼で雷道計の特許も得ている。彼は、現アマノ株式会社を創業した実業家であるとともに、発明家としてもすぐれた能力を発揮した。彼の理念は独自の技術で独創性のある商品を開発することであり、昭和 8 年（1933）にはタイムレコーダーの特許を得て、これが後に会社を発展させることにつながった。

天野修一氏を語るうえで欠かせないのは、その「国際性」「先見性」である。海軍勤務時代の昭和 8 年（1919 年）から 2 年間アメリカに滞在し、そのうち 1 年間はコロンビア大学にて経済学とフランス語を学んだ。その当時 IBM 社が「タイムスタンプ」を生産し、生産効率把握に活用されていることを知り、いずれ日本が工業化を迎える時に欠かせないものになるだろうと見抜いた先見性が見事である。これがそののち国産タイムレコーダー誕生につながり、日本の本格的な勤怠管理の



国産第 1 号のタイムレコーダー  
（アマノ株式会社提供）



パーキングシステム  
昭和 48 年（1973）に日本で初  
めてこのシステムを開発  
（アマノ株式会社提供）

幕開けとなった。その後引き続きフランス行きを命ぜられ1年半滞在。ソルボンヌ大学で3ヶ月間、経済学を聴講して学んだ。

当時外国へ留学する人は年間150名前後(文科省資料より)であった。語学も国内では十分な準備ができなかったであろう。そんな時代にあっても好奇心を思う存分発揮していろいろなことに挑戦された。当時ニューヨークへ行くにはシアトルに上陸し、大陸鉄道に乗って大陸を横断した。慣れない異国ではニューヨークに無事たどり着くのが精一杯。ほとんどの人が途中下車して観光するなど思いもよらなかった中で、彼は途中でナイアガラの滝などを観光して予定よりだいぶ遅れてニューヨークに到着し、同僚にあきれられたというエピソードが自伝に綴られている。

また持ち前の人懐こさから広い交友関係を作り上げた。まさにその後国際性豊かな活躍をされる一端が垣間見えるエピソードである。

また昭和36年(1961)以降、工場の労働環境改善にも注目し環境事業をはじめたことは当時において画期的なことであったが、ここにも先見性が垣間見える。

### 3. 後世に残したもの

彼の思考は常に未来・世界を見据えたものであった。昭和36年(1961年)に公益財団法人天野工業技術研究所を、私財を投じて設立した。その目的は工業技術に関する研究開発・研究助成である。また工業教育奨励のための奨学金援助が長年にわたって工学部の大学院生や高専生、工業高校生に対して行われている。

奨学金事業としてはもう一つあり、没後遺族から鈴鹿市に寄付された資金をもとに天野奨学金基金が設立され、昭和54年(1979年)度から令和4年(2022年)度までの長きにわたって、鈴鹿市ゆかりの高校生、大学生に奨学金が支給された。

写真の天野記念館は、昭和39年(1964年)に石薬師本町公会所として生前の天野氏から寄付されたものである。

また、次世代の研究者育成の精神は息子である天野和夫氏(法哲学者、立命館大学元総長・学長、1923年 - 2000年)にも引き継がれ、法の基礎理論に関わる若手研究者に天野和夫賞が設けられている。

昭和51年(1976年)に86歳で亡くなり、今は奥様、息子さんらとともに多磨霊園に眠っておられる。





天野記念館



天野氏揮毫による碑

取材協力 アマノ株式会社広報部、鈴鹿市教育委員会学校教育課  
文 市川倫子

